

Title	形容詞・形容動詞の語彙論的研究
Author(s)	村田, 菜穂子
Citation	大阪大学, 2003, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/44531">https://hdl.handle.net/11094/44531</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	村 田 菜 穂 子 むら た な ほ こ
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第 1 7 9 9 6 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 15 年 3 月 28 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学 位 論 文 名	形容詞・形容動詞の語彙論的研究
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 蜂 矢 真 郷
	(副査) 教 授 金 水 敏 助 教 授 石 井 正 彦

### 論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、古代（上代・中古）語を中心とする形容詞・形容動詞について、語構成の分析と、数量的分析とによって、国語学の語彙論的な面から考察したものである。

序「語彙研究の視点」、第一篇「古代語形容詞の語彙構造」、第二篇「形容詞・形容動詞の体系性と連関」、第三篇「形容詞・形容動詞の数量的分析」、むすび、および、別表一～四からなる。400字詰めに換算して約 1010 枚、および、別表が A4 用紙で 75 ページにわたる。

第一篇は、第一章「古代語形容詞の語構成－分析の対象と方法－」、第二章「古代語形容詞の質的構成」から、第二篇は、第一章「中世語における形容詞－両活用する形容詞を中心に－」、第二章「語構成と意味」、第三章「古代語における形容詞と形容動詞の交流」から、第三篇は、第一章「八代集および中古散文作品の形容詞」、第二章「中古散文作品の形容動詞－ゲナリ型形容動詞とカナリ型形容動詞－」からなる。

第一篇は、古代語形容詞の語構成について、ク活用とシク活用の別、状態の意味と情意的意味との別、上代から継承して用いるか中古に新出して用いるか、構成単位によって何単位語であるか、構成要素の結合タイプ、造語形式といった観点から、別表一により「古代語形容詞の語構成」の一覧を示し、上代資料と八代集と中古散文資料における形容詞を比較している。

第二篇は、ク活用とシク活用との両方に活用する両活用形容詞を中心に、形容詞の意味分類、末尾にケンを伴うケン型形容詞、語幹の末尾にゲを伴うゲナリ型形容動詞などについて、具体的に考察して述べている。

第三篇は、第一篇・第二篇に基づき、八代集・中古散文資料の形容詞について別表二「八代集の形容詞対照語彙表」・別表三「中古散文作品の形容詞対照語彙表」を示し、中古散文資料の形容動詞について別表四「中古散文作品の形容動詞対照語彙表」を示し、それぞれ数量的に分析している。

### 論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

形容詞の活用の種類と意味との関係については、山本俊英氏・石井文夫氏以来、ク活用が状態の意味を、シク活用が情意的意味を表す傾向の強いことが指摘されている。形容詞の意味分類についても、それ以降多くの説が出されている。本論文は、形容詞の意味分類については阪倉篤義氏の説を修正して示し、また、形容詞の語構成等について、

上代資料と中古を中心とする資料とを比較することによって、山本氏が「ク活用でありながら情意的な意味を表わして例外となる」とする問題を、主語―述語の句構造にある「～ク活用形容詞」が中古に多く新出することによって起こるものと分析していて、これは、新しい解釈であるとともに説得力があつて、評価できることである。

第二篇でとり挙げられる両活用形容詞については、鈴木丹士郎氏他の先行研究があるが、それらの多くは部分的に述べるものであり、多くの両活用形容詞の形成について、これほど全面的に述べたものは本論文のみである。

第三篇の数量的分析からは、形容詞においても形容動詞においても、異なり語数から見ると、中古散文資料では宇津保物語ないし蜻蛉日記あたりに変化の時期があるとしている。これは、これまでに金水敏氏が動詞ヲリについて述べることや安部清哉氏が形容詞について指摘することとほぼ一致していて、この時期が国語史的に見て重要であることを示している。

また、別表四は今後公にされれば利用価値の高いものであると言える。

一方で、本論文は、第一篇における語構成の分析に用いる記号や一部の用語がわかりにくいことが問題であり、形容詞の考察に比べて形容動詞の考察が手薄であるという問題もある。また、形容詞・形容動詞全体を対比的に考察しようとするためにはあるが、中古の漢文訓読文資料や和漢混淆文資料の参照が少ないことも問題であろう。

しかしながら、本論文は、上代資料・八代集・中古散文資料に見える形容詞・形容動詞を総体的にとらえようとしたものであり、多くの評価できる内容を持っていて、価値あるものと言うことができる。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものとする。